阿波の偉人再発見！

鳥居龍蔵

その④

蓄音機におさめられた沖縄の唄

沖縄県八重山諸島の石垣島に国指定史跡「川平（かびら）貝塚」があり、中国製の陶磁器や地元で作られた土器が大量に出土しています。この貝塚を初めて発掘調査したのが鳥居龍蔵でした。龍蔵は、この貝塚から出土した把手（とって）のついた土器に「外耳土器（そとみみどき）」と名付けましたが、この言葉は今でも使われている学術用語になっています。そして、八重山の人たちがどこから来たのか、台湾や沖縄島の人たちと歴史的にどのような関係にあったのかについても研究しました。

龍蔵は1896年（明治29年）の第一回台湾調査の帰りに沖縄に立ち寄ったことがありましたが、本格的な調査は1904年（明治37年）に行いました。この時は、後に「沖縄学の父」ともよばれる伊波普猷（いはふゆう）とともに沖縄に赴きました。

頭上運搬する首里の女性

そして、沖縄における考古学調査の口火を切った龍蔵は、沖縄島の伊波貝塚、荻堂貝塚を調査するとともに、沖縄の言葉や民謡にも関心をもって、それらを録音しようと考えました。そのために、蝋管蓄音機（ろうかんちくおんき）を調査に持ち込んだのです。これは、円筒形の蝋管に音声を記録していくものですが、その蝋管蓄音機を野外調査に使用したのは、学界で最初のことであろうと龍蔵自身が自叙伝でふり返っています。その蝋管で、沖縄島や八重山諸島の民謡を録音しました。この時の蝋管は東京大学人類学教室に保管されていましたが、残念ながら、関東大震災の時に失われてしまったようです。

また、民俗芸能や風習にも関心をもち、神官の役割を果たした祝女であるノロの調査をしたり沖縄演劇を鑑賞しました。

台湾調査の時からカメラを導入したり、沖縄調査で蝋管蓄音機を用いたことなどは、当時の最新機器を取り込む自由な発想力が龍蔵にあったことを示すエピソードといえるでしょう。

最後に、沖縄調査で注目されることをあげておきましょう。それは、地元の研究者とともに「沖縄人類学会」や「沖縄学術研究会」の発足に尽力したことです。地域で地道に努力していた研究者とともに歩んでいこうとする姿勢が感じられる出来事です。

なお、龍蔵が沖縄島や八重山諸島の調査で得た土器は、現在、東京大学総合研究博物館に保管されています。

（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　石尾和仁）